



## 家康公と駿府(二)

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝つねなかり



家康公が最初に駿府で暮されたのは八歳から一九歳迄。その間今川家の扱いは決して悪くなかったことは前号に書きましたが、一方飽くまで人質として扱う人も多々居たのも事実で、公は人間と言う生き物の本質をジッと観察しつつ成長しました。

弱者と見れば徹底的に苛める残忍で意地の悪い人。逆に優しく励まして守り庇う人。自分の利益にならなければ全く無関心な人。様々な人々が居り、公は少年の鋭い観察眼でそれらの人々を見詰めるながら成長しました。さらに彼の心の中には、彼の成長を待ちながら過酷な生活を強いられている三河の家臣団の事が常にありました。少年には重い責任ですが、後の公の生涯を見れば駿府での成長時代に養われた「耐える心」と人間の本质を見抜く観察眼が如何

駿河の花見(狩野探幽「東照社縁起」より)  
賤機山に花見に出かけ、僧との対話で悟りを得た家康公を描く。

に大切であったかが解ります。

一方、信長公は生まれながらの将です。しかも天才的な将でした。若くして将となった彼は部下達を常に上からの目線で見つめ、その能力を測りました。彼の期待に添えなかった部下の末路は無惨でしたが、結局そのことが命取りとなり、次は自分がやられると確信した明智光秀に奇襲されて亡くなります。信長公は大変に孤独な人だったろうと思います。

秀吉公は、その信長公に全てを賭けて成長した方です。しかも武士としての最底辺から昇った方ですから、人の心も良く解った方だったでしょう。しかし彼は常に前に前にと進んでいないと自分の存在価値が失われるという強迫観念があり、それが朝鮮半島を経由して中国から天

竺にまで権威を広げると云う壮大なものとなりました。プレッシャーが強すぎたのか、晩年の彼の言動にはなにか狂的なものが感じられます。

こうして御三方の性格を世界に当てはめて見ますと、西欧社会の支配者は古今を通じて大半が「信長公型」です。アジア社会ではそこに「秀吉公型」が入って来ますが、一方家康公型の支配者と、二五〇年を超える平和な国家繁栄の例は世界史には見つからないように思います。以前に書いたようにも思います。ある会合で中国の若い方が「徳川さん」と言つて握手を求められ、なかなか私の手を放しませんでした。その方は孫家康と言う方で、そのお父上が家康公の生涯に心酔して命名されたそうです。日中の長い、起伏に富んだ歴史の中でも珍しいケースだと思えます。